

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

## みろく 弥勒菩薩

平成28年6月第3週放送

みろくぼさつ  
弥勒菩薩という、台座に腰を掛けて、右足を左の腿<sup>もも</sup>の上へのせ、右手を頬<sup>ほお</sup>のそばへ立てて指を伸ばし、頭には、帽子のようなものをかぶり、なんともいえない暖<sup>あたた</sup>かさが顔に表れている、そのようなお姿を思い浮かべるのではないのでしょうか。

これは、国宝彫刻第一号に指定されている、京都の広隆寺<sup>こうりゅうじ</sup>の弥勒菩薩半跏思惟像<sup>はんかしゆいぞう</sup>のお姿で、半跏思惟<sup>はんかしゆい</sup>とは、片方だけ足を組み考えにふける様子を表しています。

みろくぼさつ  
弥勒菩薩は、古いインドの言葉で、慈悲の“慈”、<sup>いつく</sup>“慈しみ”という意味を持つ「マイトレーヤ」といい、この音をあてて「弥勒」という名前の菩薩なのです。

弥勒菩薩は、よく知られた観音菩薩や地藏菩薩よりも、あまり一般的ではないような気がしませんか。実は、弥勒菩薩は別名「未来仏<sup>みらいぶつ</sup>」ともいい、お釈迦さまが亡くなったあと、56億7千万年後にこの世に出てきて仏さまとなり、教えを説いて人々を救うとされた菩薩で、特に平安時代において人々の信仰を集めたと言われています。

今を生きる私たちには、56億7千万年後という気の遠くなるような時間の後であられる仏さまですので、自分には関係ないのではないかと、と思われる人も多いかもしれません。

しかし、弥勒菩薩は思いやりがあるお姿で、お名前のおりに慈悲のころを持って、<sup>いつく</sup>慈しみの世界へ導いてくださる菩薩として人々の信仰を集めたのです。

弥勒菩薩には、半跏思惟<sup>はんかしゆい</sup>以外のお姿も見受けられます。

これからの良い季節、弥勒菩薩巡<sup>めぐ</sup>りをし、古<sup>いにしえ</sup>の人々に思いを馳<sup>は</sup>せてみてはいかがでしょうか。

そして、その優しいお姿に触れた時にわき起こる、<sup>みずか</sup>自らの<sup>いつく</sup>慈しみの心を大切にしたいものです。

— 終 —